

# 死の教育に関する人間学的研究

ばく しね

Park Sinae

本稿では、死の直視を大人だけではなく子どもにとっても同じく根本課題であると認識し、教育における死の自覚の呼びかけを本務とする死の教育を提案した。そのために死の教育の持つ人間学的な意味を「死と人間」「死と子ども」「死と教育」の3つの部分に分けて考究を進めた。

第1章は「死と人間」と題して、人間における死の直視の持つ意味について考察した。死の直視は我々が根源的で全体的な方向へと向けて深く省みるように促し、このような死へとかわる存在としての自己認識は、これまで忘れかけられていた同じ運命を抱え込んで生きる他者に対する労りの心と呼び起こすことを、聖書、パンセ、小説、詩、手記などのテキストを取りあげて考察した。

第2章は「死と子ども」と題して、死へとかわる存在としての子ども理解を新たに示した。子どもという存在の意味、子どもにおける死の認識や悲嘆の問題の考察を通して、人間における根源的な課題である死は、子どもたちにも同じような重要な意味を持つものであり、人生の早い段階において死とかわる体験は、大人に比べて決して軽いものではないことが明らかにされた。

第3章では、死という人間存在の根源的な事実への直視を教育の中心課題として教育の再定義を図った。まず、従来の教育における死の扱いに対する問題点を具体的な場面を挙げて指摘し、今後教育において死をどのように扱うべきかについて論究した。そして、死の直視を促さねばならない死の教育がむしろ死への回避の手段として用いられている現状を指摘し、死という観点から既存の教育を批判的に捉え直すことを通じて、今後の教育が死の問題にどのように取り組むべきかその方向性を提案した。

死への存在の自覚が、我々が人間として生きるための根本的な条件として我々に課せられている。死への存在の自覚は、それを通じて生きることの根源へと向かう本来の自己認識に至るようになるという点は子どもにおいても変わらず重要である。死の教育の目的は今、ここにいる子どもたちが抱えている死の問題に、教師も子どもも誠実に向き合うことによって、より深い人間理解の次元を生きていくことにある。さらに、このような徹底した死の直視により、その同じ眼差しを他者にも注ぐことが可能となってくる。死の直視を通じた苦の経験を通して拓かれる他者との「共苦」の関係性は人間教育における極めて重要な部分である。